

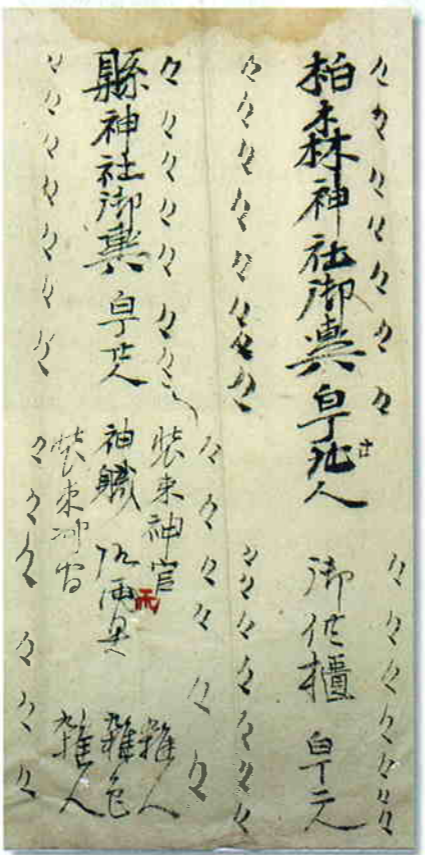
神幸祭と金神社・榎森神社

伊奈波神社教学研究員

笥 真理子

伊奈波神社からは、縁起や狛犬、刀剣などのほかに、たくさん古文書も岐阜市歴史博物館に寄託されています。大型の行李三箱にぎっしりと詰まっていた古文書は、去る三月に整理が完了しました。その数は二〇〇〇点を超え、明治二十四年（一八九二）の濃尾大震災以前のもも一部含まれていることがわかりました。神社の由緒、祭神、祭礼や氏子、社殿造営、会計など内容も多彩で、今まで不明だった多くの事実を知ることが出来ます。今回はその中から、四月の神幸祭における神輿の渡御について紹介します。

今から六年前までは、イニシキイリヒコノミコト（五十瓊敷入彦命）の霊をまつた神輿が伊奈波神社から金神社・榎森神社・赤口神社と、さらに隔年で北野神社を巡幸して、夕方に伊奈波神社で還幸祭が行われていました。



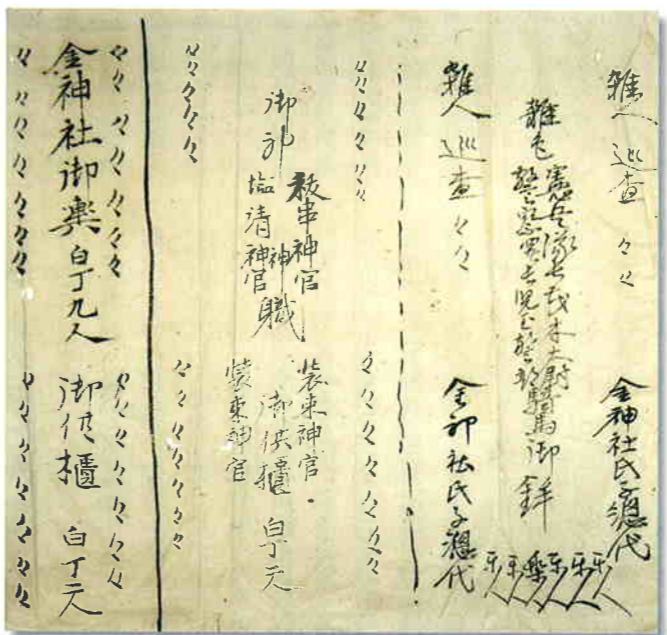
キイリヒコノミコトの後であるヌノシヒメノミコト（淳熨斗姫命）、二神の子であるイチハヤオノミコト（市隼雄命）、イニシキイリヒコノミコトと毛里倫満娘との間に生まれたタラチネノミコト（擁烈根命）で、イニシキイリヒコノミコトの御家族がそろって渡御したわけです。このときは、金神社に三社の神輿がそろい、参道を南に下り、東に折れて長良橋通り（当時は「八間道」）に出て南行、停車場（現在の名鉄岐阜駅付近）に至り、そこから長住町を東に向かい、旧停車場（現在の名鉄各務原線安良田踏切付近）から北上し、江戸時代のメインロードであった「御館街道」

平成十九年に金神社と伊奈波神社の神輿が並んで渡御することとなり、翌二十年には伊奈波・金・榎森神社三社の神輿がそろって渡御し、若宮町交差点で三社合同祭典を行う現在の形になりました。これは岐阜まつりの新たなページでしたが、実は明治時代にも金神社・榎森神社の神輿が伊奈波神社の神輿とともに渡御していたことが残された古文書からわかりました。明治初期の『伊奈波神社同合社物部神社明細取調書』（岐阜県歴史資料館所蔵）では、「かつて伊奈波神社例祭には神輿をかつぎ出し奉って上加納村（現在は岐阜市）金神社へ神幸の式をおこなったという」と述べられています。江戸時代の記録にこの巡幸は確認できませんが、明治初期には途絶えてかなりの年月がたち、すでに言い伝えになつていました。その復活への動き

をへて伊奈波神社に向かいました。帰御のときは伊奈波神社から西へ進み、矢島町から南行したと思われれます。翌三十一年四月の神幸祭についても、二月初ころから協議が重ねられました。その結果、四月四日午前七時に伊奈波神社神輿が金神社へ渡御、金神社・榎森神社・県神社の神輿とともに午前十二時に伊奈波神社に至り、翌五日午前七時に伊奈波神社例祭、九時に金神社ほか二社の神輿が帰御しました。まず伊奈波神社から金神社に神輿が渡御したのち、ともに伊奈波神社に向かう点が前年の正遷宮のときと異なります。

は、濃尾大震災後に始まります。震災復興がすすむ明治二十七年の例祭準備にあたって、伊奈波神社氏子総代たちは、金神社氏子に山車の曳き出しと俄（わか）などの上演を打診し、その結果、旧岐阜町と旧上加納村とが相互に山車を乗り入れて「互いに麗しくしたい」との約束がなされました。山車が巡ったルートは具体的にわかりませんが、これが金神社と伊奈波神社の協同復活への第一歩でした。

震災で焼失した社殿が再営竣工し、正遷宮が挙行された明治三十年十一月二十三日には、金神社・榎森神社・県神社の神輿が伊奈波神社へ渡御し、翌二十四日午後には帰御しました。その行列は、大櫛を先頭に、伊奈波神社の総代、唐びつ、御幣、伊奈波神社神官、続いて



このときのルートは、決定まで何度か変更がありました。伊奈波神社から金神社への往路は、初案ではまっすぐ西行して矢島町から長良橋通りを南行するルートでしたが、最終的には伊奈波神社を出て「御館街道」をいったん北に向かい、本町通りを西に進んでから長良橋通りを南行するルートに変えられました。翌日の金神社への帰御も、初案は伊奈波神社から西へ出て現在の伊奈波通二丁目と三丁目の間の角で南に進路を変え、上竹町から下太田町へと進み、そこで西に曲がって裁判所前（現在の岐阜市役所付近）から南進する予定でした。しかし、伊奈波神社の北に当たる末広町・加和屋町（本町二丁目）・本町通りをへてから南進して上竹屋町・中竹屋町を通る部分が増加されました。変更部分はいずれも、伊奈波神社の北部地域に神輿の巡幸範囲を拡大したことになります。これは新たにルートに入る各町氏子からの要望によるもので、往路の変更は四月二日というぎりぎりの時期になって決定しています。なお、金神社から

金神社・榎森神社・県神社の神輿がそれぞれ氏子総代や神職とともに連なり、総勢二〇〇人を超える大きなものでした。ここに掲載した写真は、そのうち金神社など三社の部分です。金神社（岐阜市金町）・榎森神社（同若宮町）・県神社（同県町）はいずれもかつての上加納村に鎮座し、明治二十二年に岐阜市が成立すると岐阜市内となつた区域です。祭神はそれぞれ、イニシ

伊奈波神社までは前年の正遷宮のときと同じルートでした。沿道に当たる各町には道の掃除と打ち水をするのが依頼され、また二階からの拝観は慎むべきことが伝えられました。翌年以後も、金神社などの神輿が伊奈波神社から帰御する日は年によって変わりましたが、合同の神輿渡御が行われました。明治三十六年七月に金神社の社殿再営竣工のときにも、伊奈波神社の神輿が金神社に渡御しています。しかし明治三十七年、日露戦争の戦時であるため、金神社などからの神輿渡御は中止されました。しかし伊奈波神社神輿の金神社への渡御は続けられ、明治四十三年からは榎森神社にも巡幸することになり、平成十八年以前の形がほぼできあがったわけですが、残された記録から大正時代以後の変遷すべてを知ることができません。平成二十二年に始まる三社神輿そろっての渡御は、おそらく明治三十六年以來約一〇〇年ぶりの復活だったと考えられます。